

令和2年度文化芸術による子供育成総合事業－巡回公演事業－

ワークショップ実施計画書

制作団体名	有限会社 劇団風の子北海道
公演団体名	有限会社 劇団風の子北海道

内容
<p>新型コロナウイルスの影響を考え、各学校の皆さんに内容の変更を提案します！</p> <p>いつもの年は、「子ども達の表現が主役！」を大切に、劇のクライマックスの部分に、クラス、学年単位で参加してもらい、一体感あふれる本公演を作っています。</p> <p>● 本来のバージョンは・・・</p> <p style="text-align: center;">ワークショップの日・・・2コマ(90分) 本公演の日・・・リハーサル1コマ(45分) 本番2コマ弱 (上演時間は70分)</p> <p>ワークショップでは、表現するための「集中とリラックス」や身体ほぐし、発声などの後、あらずじ、舞台の演出を学習しながら「火の玉おやじと大暴れ」「雨姫さまと雨降らせ」の二つの場面をみんなで作っていきます。雨を降らせまいとする火の玉おやじと共に熱い炎を燃やしたり、雨姫様と共に水の流れや生き返っていく魚たち、美しく咲きそろう花を表現します。</p> <p>はじめは客席で観劇し、場面になったらその場から参加。またラストシーンを観劇できるように流れを作りました。衣装や小道具を使った目立つ役割もありますが、基本的に全員で一体感をもって表現できる内容です。本公演の前に、本物の舞台で俳優たちと一緒にリハーサルをして本番に向かいます。</p> <p>しかし、新型コロナウイルスの影響で、今、現場の先生たちから</p> <p>① 感染の不安 (10月の公演でも先が見えない。)</p> <p>② ワークショップの日にち、時数を確保できない。(現在の長期休校による影響。)</p> <p>という切実な声を聞いており、通常のプログラムを変更する必要性を感じています。そのため、今回は観劇に重点を置く内容を提案します。</p> <p>● 新型コロナウイルス対応のバージョンは・・・</p> <p style="text-align: center;">本公演の日・・・本番2コマ弱(上演時間は70分)</p> <p>子ども達と共演するためには、どうしても近い距離での触れ合いや言葉かけが必要になります。共演を考えず、ワークショップのみの内容(声を発しない表現や体操)を行うとしても、指導者と子ども達が同じ空間にいることは避けられません。だからと言ってインターネットやDVDなどでの指導は私たちの劇の場合はかえって難しく、先生方の負担も大きくなると思いました。</p>

新型コロナウイルスの終息を願って、今年だけは、自分たちの学校で、目の前で劇を観ることを、大きな体験としてもらえたらと考えます。

その際、以下の工夫が可能です。

- ① 上演中、体育館の窓を開け、換気をする。
- ② 客席の子ども達にはマスクをしてもらい、間隔をあけて座ってもらう。
- ③ 必要があれば、2 ステージに分けて上演する。
- ④ 準備・片付けの際、劇団員はマスクをつけ、舞台・客席の消毒も行う。
- ⑤ 劇団員がなるべく体育館以外の本校舎に入らないようにするため楽屋も体育館内で行う。

その上で、出会いの時間が短くても心の交流を大切するため、劇を観た後、感想や質問などのお便りがあれば、しっかりと劇団員が返信します。劇の内容だけでなく、学芸会につながる質問もできるかぎり答えます。このように大変な時だからこそ、『マーレンと雨姫』のお話が子ども達に勇気や元気を与えられたらと願っています。

この提案をした上で、新型コロナウイルスによる影響が好転したり、子ども達の表現体験のためにワークショップを行いたいということがありましたら、各学校の要望を聞き対応いたしますので、ご相談下さい。

タイムスケジュール（標準）

上に記載

派遣者数

もしもワーク可能な時は2名でうかがいます。

学校における事前指導

特にありません。

令和2年度文化芸術による子供育成総合事業—巡回公演事業—

本公演実施計画書

制作団体名	有限会社 劇団風の子北海道
公演団体名	有限会社 劇団風の子北海道

演目
<p>「マーレンと雨姫」</p> <p>原作 テオドール・シュトルム「たるの中から生まれた話」 脚色 多田徹、中島茜 演出 鳴海輝雅 美術 有賀二郎 音楽 岸 功、菊池大成</p> <p>みなさんの学校に旅の一座がやってきます。今日ここで演じるのは『マーレンと雨姫』というお話……。</p> <p>むかし、むかし、ドイツという国のある村に、マーレンという女の子がいました。マーレンの村は今、とても大変です。2年も3年も日照りが続いているのです。草木は枯れ、牛やヒツジや人間も水がほしくてたまりません。村のみんなが困っていました。</p> <p>「雨が降らないのは、雨姫様が眠っているからだって！」とマーレンに教えてくれたのは羊飼いの少年アンドレース。アンドレースのおばあちゃんに話を聞いて、二人は雨姫様を探しに出かけます。雨姫様が守る深い井戸までの道すじは、おばあちゃんが教えてくれました。でも、雨姫様を起こす呪文と井戸のカギのありかは分かりません……。</p> <p>雨姫様が眠っている間に「火の玉おやじ」は大あばれ。雨なんか降らされてはたまらないと行く手を阻もうとします。二人は知恵と勇気を合わせて進んで行きますが、はたして二人は雨姫様を起こし、村に雨を降らせることができるのでしょうか。</p>

派遣者数
7名

タイムスケジュール（標準）

開演の3時間半前から準備します。（ワークショップ・リハーサルがある場合は4時間前）
上演時間は70分。開演の5～10分前に入場開始。
終演後、片付けが2時間半～3時間かかります。

実施校への協力依頼人員

搬入・仕込み、客席づくり、搬出など、すべて劇団員が行います。

演目解説

「マーレンと雨姫様」は1958年、劇団風の子がはじめて全国公演をするために創立者の多田徹によって書かれました。（原作はドイツの作家テオドール・シュトルム（1817～1888）の「たるの中で聞いた話」より「雨姫」）。

劇団風の子北海道では「マーレンと雨姫」の題名で、北海道独自の視点「子どもと自然」をテーマに1997年から2003年まで巡演し2014年から再演しています。

むかし人々は「雨姫様」や「火の玉おやじ」などの自然の精霊たちと共に暮らしていました。雨姫さまは地下の水脈の源の井戸を守り、程よく雨を降らせたり川の水を流してきたし、太陽の精霊「火の玉おやじ」も作物を育てる大切な恵みをもたらしてくれました。しかし時に自然は厳しく、人々の命を奪ったり困らせたりする存在です。だからこそ人間は昔から、精霊に語りかけ祈り祭りをしてきました。

時代が変わり人間中心の生き方が当たり前になると、人々は自然の存在を忘れてしまいます。この物語の中では、自然との付き合い方を忘れないようにしてきたアンドレスのおばあちゃんが雨姫のことを子どもたちに伝え、子ども達は信じて進んでいきます。

劇を見ている子どもたちは、マーレンとアンドレスと一体となり、心を躍らせてみているようです。物語の中で見えるマーレンとアンドレスの成長は、子ども達の心にも響いているようです。

子ども達が物語の世界を自分の想像力を使ってイメージできるように舞台をフロアーに作り自然光を取り入れたり、効果音や音楽を俳優が演じながら生で演奏したり（機械音が苦手な子も楽しんでくれています。）、小道具、衣装の使い方の工夫で6人の俳優が何役もの役割を演じたりしています。

児童生徒の公演への参加方法、公演に参加させるための工夫

今年の場合は、ワークショップ実施計画書をご参照ください。

今までの公演では、

劇の中の自然な流れで子ども達の共演部分を組み入れ、物語の流れが途切れることなく、鑑賞と共演を両方楽しめるようにしてきました。

子ども達の表現に寄り添って俳優たちが共演しているので、特別支援学級の子ども達も楽しんでくれています。

共演したクラスは大きな達成感を持ってくれているようです。

児童生徒とのふれあい

今までの公演では、

共演する子ども達とのリハーサル等での触れ合いはもちろん、観劇する子ども達の客入れも行い、送り出しでは握手や感想を聞いたりしてふれあいを大切にしてきました。舞台の楽器や小道具を近くで見て行ってもらうことも希望があれば積極的に行っていました。

しかし今年の場合は、新型コロナウイルスの心配があると思いますので、直接のふれあいを避けたほうが良いかもしれないので、各学校と相談し対応します。

ワークショップ実施計画書に書いたように、事後の感想交流は積極的に行いたいと思います。